

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：32623

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2016

課題番号：25590270

研究課題名(和文) 高等学校における道德教育のグランドデザインの開発に関する研究

研究課題名(英文) Study on development of Grand Design of moral education in high school

研究代表者

押谷 由夫 (OSHITANI, YOSHIO)

昭和女子大学・生活機構研究科・教授

研究者番号：50123774

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、高校生に対する道德教育のグランドデザインの構築を図ることを目指した。高校の道德教育の充実をはかるには、その中核となる教育理念が必要であり、それが高校生期という発達段階に達してこそ求められる「良心の覚醒」を目指す良心教育なのである。このグランドデザインを実践していくためには、道德学習に主軸を置いた学校内における指導体制の見直しが必要である。それと同時に道德学習時間を教育課程上に明確に位置づけることによって、キャリア教育と道德教育を関連づけ、長期的、計画的な学習支援の実現をはかっていくことが重要である。

研究成果の概要(英文)：In this research, we aimed to construct a grand design of moral education for high school students. In order to enhance moral education at high school, the core educational philosophy is necessary. I think that should be conscientious education aiming for "arousal of conscience" that it is only when it reaches the developmental stage of high school age. At the same time, it is important to relate career education and moral education by clearly positioning moral learning time on the curriculum, and realize long-term, planned learning support.

研究分野：道德教育

 キーワード：高等学校における道德、良心教育 アイデンティティの確立 サービスラーニング 自己内省ノート  
 道德教育のグランドデザイン

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 国内の研究

高校生期の道德教育の研究は、昭和35年の倫理・社会の設置を契機として、これまで公民科や特別活動、産業社会と人間、総合的な学習の時間を中心として、在り方生き方教育に関わらせて部分的な研究がなされてきた(三上,1984)。また、西野(2012)をはじめ進路指導、職業教育、キャリア教育等と道德教育との関連について行った研究も存在する。

しかし、道德教育を正面から取り上げた理論的研究は少なく、現段階では実践事例を交えながらその問題点について指摘することに留まっている。学校現場においても、茨城県や埼玉県、千葉県全公立高校で道德授業を取り入れているが、教育実践や指導内容・方法が共有されにくい状況が続いている。

### (2) 国外の研究

韓国では小・中学校において教科「道德」が実施されているが、高校では選択科目として道德教育科目が設けられている(関根, 2013)。中国の高校では道德教育科目「思想政治」が設けられており、より思想教育的側面を強調しながら、実践的な人材育成が目指されている(岡田, 2011)。だが韓国や中国では、高校生の学習時間の多くが大学受験準備に費やされる傾向にあり、体験活動に携わる時間が少なく、彼らの道德的実践力をいかに育むかが大きな教育課題の一つとなっている。

米国においては、キャラクター・エデュケーションやサービス・ラーニングの実践や理論的研究が進められている(Lickona, 1991)。欧州においても高等学校における道德教育や市民教育が提案され実践的研究も進められている。しかし、政治体制の変化や新しい教育システムなどへの対応に追われ、体系化した道德教育の学習プログラム開発が不十分な状況にある。

### (3) 研究のこれまでの成果

研究代表者は、今まで国の道德教育政策はもとより、茨城県、埼玉県、神奈川県高等学校における道德教育の充実施策の実施や調査研究等に携わってきた。また、海外(中・韓・米国)の実態調査や高校生の道德性に関わる意識や行動についての国際比較調査(日・中・韓)も実施してきた。これらの研究成果については、随時、北京師範大学における日中共同研究報告会やAME国際学会、及び国内の複数の学会において報告を行っている。

## 2. 研究の目的

本研究は、今日の最も重要な課題でありながら体系的な研究がなされていない高等学校教育における道德教育について研究を行うものとする。具体的には、青年期的人格形成の在り方を中核に据え、国内外における実践的取り組みを考察しながら、高等学校の今

日的在り方を踏まえて、高等学校における道德教育のグランドデザインを構築し、国内外に発信することを目的とする。

## 3. 研究の方法

ここでは、以下に示す四つの方法を主に用いて研究を進めるものとする。

### (1) 先行研究の検討

高校生期における道德教育を研究するにあたり、この時期の最重要発達課題の一つであるアイデンティティ形成に関わる要因について心理学や社会学等の分野を主として文献研究を行う。また、シュブランガー等の青少年教育理論について先行研究をもとに考察することによって、高校生期に必要な道德教育とは何かを具体的に検討していく。

### (2) 現地視察

諸外国の高等学校ではどのような道德教育を行っているのかについて、米国や中国等の教育機関を中心に現地視察を行うことによって生徒や教育内容の実態を把握する。

### (3) 質問紙調査

ここでは、高校生の道德教育に関連する質問紙調査を以下のように実施する。

- ・高校生のアイデンティティ形成要因についての質問紙調査(東京、千葉、埼玉、新潟等)
- ・高校生の道德性発達に関する国際調査(日本・中国・韓国の高校生調査の実施)
- ・高校教員における道德授業についての質問紙調査(研究協力：兵庫県公立高校教員)

### (4) ワークショップ・研究協議会

高校の道德授業や、self-examination noteの開発に関してワークショップや研究協議会を開催することによって、意見交換を行う。そこでの研究成果をもとに高等学校の道德教育のグランドデザインの構築をはかる。

## 4. 研究成果

本研究の研究成果は以下の通りである。

### (1) 高校生期におけるアイデンティティ形成の再検討

ここでは、高校生のアイデンティティ形成過程及び要因について、主に先行研究をもとに考察し、次のような結果を得た。

高校生期は心理的・身体的にも不安定な時期をむかえるだけでなく、人生における重要な準備や選択を迫られる時期でもあり、自己不一致を招きやすい(山本, 2010)。また、この時期のアイデンティティ形成にとって必要なのは役割変化の認識であるが、それらを受け入れるには「重要な他者」である両親・友人・恋人との関係性が大きな影響を与える(杉村, 1999)。特に、高校生期における親子関係においては、家庭内における子どもの役割をより責任あるものにし、社会的役割の

変化を受け入れやすい状況をつくる必要である(落合・佐藤, 1996)。

若者がアイデンティティを形成していく過程においては、周囲との調和、つまり、友人関係が大きく影響すると考えられている。特に、高校生期の友人関係は、アイデンティティ形成を促すための自己受容に深くかかわっている(山田・岡本, 2006)。友人との関係性を深めていくにはより高度なコミュニケーション力や他者に対する洞察力、関係調整力等の対人スキルが必要とされる。そのスキルを身につけていく過程において、自己の言動や行動について内省する機会を多くもつことになるからである。この自己内省こそが、真にアイデンティティ形成にかかわる重要な役割を果たすものと考えられる。しかし、友人との良好な関係性を保つことにこだわりすぎると、自己に対する関心が薄れ、過度なアイデンティティ混乱や問題行動へと繋がってしまう可能性がある。それについても、十分な理解をしていく必要がある。

高校生期におけるアイデンティティ形成には、自尊感情を高めながら自己受容を行っていくことが有効であるとされる(岡田, 2007)。だが、自己肯定感を単に高めることだけに集中しても、本来の意味での自尊感情を高めることにはならず、それは攻撃性をもとに過度な自己愛的パーソナリティの形成を導いてしまう可能性があることも視野にいれなければならない。

また、自己嫌悪感や自己に対する劣等感や否定的感情と直面することによって、より高い自己を目指す原動力となる。さらにこれを受け入れる精神的耐性が必要であり、自己嫌悪感を自己肯定感に変えていく自己回復力を育まねばならないのである。

高校生期におけるアイデンティティの形成には、まず職業を媒介としながら、自己の将来についてじっくりと考え、社会的役割の自覚を促す「職業的アイデンティティ」の形成を目指す必要がある(宗近・田島, 2007)。そのためには、インターンシップやボランティア活動等の体験学習を通して、職業人として求められる人間としての在り方生き方についてじっくりと考えてみるのが重要である。また、体験学習を短期的な学習活動としてではなく、長期的学習活動として捉えていく必要があり、そこでの成果を適切に評価していくことが「職業的アイデンティティ」の形成を促すことに繋がっていくものとして考えられる。

これまでの における考察から高校生期におけるアイデンティティ形成を促す要因について検討を行った。その結果を踏まえ、「高校生期のアイデンティティ形成にかかわる4観点」をここに示し、本研究における今後の学習のポイントとして位置づける。

<高校生期のアイデンティティ形成にかかわる4観点>

1) 自己の役割変化についての認識を促す

こと

2) 友人関係(人間関係)を通して自己内省を深め、自己受容を促すこと

3) 異なる価値観を受け入れながら、自己の価値観を問い直すこと

(その際、自尊感情を低下させないように考慮しながら自分自身との対話を深める)

4) 社会的役割の自覚を促す「職業的アイデンティティ」を形成すること

## (2) 高校生の道徳性発達

アイデンティティの形成を促す要因

高校生期における同一性混乱要因について検討するために質問紙調査を行い、SPSSとAmosによる因子分析を行った。その結果、3因子(「時間的展望の混乱・労働麻痺」、「自己混乱」、「理解者不在」)が得られた。その抑制因子として3因子(「地元報恩感謝」、「中学報恩感謝」、「家族関係良好」)が得られ、特に「中学報恩感謝」因子は「時間的展望の混乱・労働麻痺」を抑制することによって、「職業決定度」に影響することが明らかになった。

日本・中国・韓国における道徳性の特徴

次に、日本・中国・韓国の高校生を対象に道徳性の違いをみる質問紙調査を行った。ここでは、「道徳性尺度」と「自己認識尺度」を独自に作成し、三母集団に対して、道徳性尺度を説明変数、自己認識尺度を媒介変数、職業決定度を目的変数として、最尤法による多母集団同時分析を行った。その結果、三国とも道徳的実践意欲から道徳的実践行動、社会役割認識へと関連がみられ、それが職業決定度に正の影響を与えていることが示された。また、道徳的実践意欲は他者相談願望について正の影響を与えること、道徳的実践行動を介さずに社会役割認識に対して直接的に正の影響を与えることが明らかになった。このことから、道徳性を高め、他者との関わりを通じて自己の社会的役割を受け入れていくことが、高校生の職業決定の促進に繋がると考えられる。また、日本では「優しさ」や「思いやり」、中国では「正義感」や「真面目さ」、韓国では「誠実さ」というように、優先する道徳的価値に違いがみられた。

## (3) 高校生期における道徳教育の可能性

ここでは、シュプラungerが提唱した良心教育に関わる先行研究をもとに高校生期の道徳性にどのような特徴がみられるのかについて考察を行い、以下のような結果を得た。

シュプラungerは、青年期における道徳性は、「社会的(集団的)道徳」と「個人的倫理」とがバランスよく育まれることで、健全に発達していくものとして捉えている。また、青年期の特徴として「自我の発見」、「生活設計が次第にできること」、「個々の生活領域に進み入ること」の三つがあることを示している。

青年期がそれまでの幼少期と大きく区別されるのは、自分自身が何者であるかの深い問いかけがはじまることにあるとされる。さ

らに、そのことを契機にして、青年は自分自身の生き方だけでなく、社会一般に対しても自己の役割を認識し、「責任」をとることが求められるようになる。この「責任」を果たすための自分なりの価値基準を探究することが求められるのである(Spranger, E, 1924)。

シュプランガーが考える真の人間教育には、「発達の援助」、「文化財の伝達」、そして「良心の覚醒」という三つの主要面がかかわっているとされる。

その中でも特に、青年期における教育において、シュプランガーが重要視したのが「良心の覚醒」を目指す良心教育である。「良心」とは、個人の魂の中核に位置するものと考えられ、その人の思想や行動にいたるまで全てを監視し、善の方向へと導くとされる。だが、この「内的調整器としての良心」は、適切に自己内省が深まることによって覚醒されるものであり、これが覚醒されなければ、人間は進むべき道を見失ってしまうか、あるいは見誤ってしまうかのどちらかであるとされる。したがって、高校生期においては、「良心の覚醒」を目指すための良心教育を行っていくことが必要とされるのである。

その上で、本研究における良心教育について定義するならば、『良心の覚醒』を目指しながら、『社会的(集団的)道徳』および『個人的倫理』の両面から生き方を教える道徳教育」と捉えることができる。さらに、「良心の覚醒」とは「学校、地域、社会がそれぞれ連携することによって、高校生に様々な道徳的価値にふれさせ、その価値を自己内省によって深め、自分自身の価値意識としてあらためて統合すること」と定義する。

シュプランガーは、あまりにも「職業」について青年が理解していないと指摘する。職業というものは、経済活動の一つを担っているのと同時に、その職業にとって必要な職業倫理や重要視される価値というものがその中に含まれている。したがって、高校生期における真のキャリア教育を実現させるためには、道徳的価値とのかわりにおいて自己を目指す「職業」と向き合っていくこと、すなわち良心教育を学ぶ道徳教育とキャリア教育を関連づけていくことが必要なのである(Spranger, E, 1924)。

#### (4) 日本の道徳教育と特別活動・キャリア教育における変遷と課題

高等学校における道徳教育の位置づけは、「人間としての在り方生き方」教育として、公民科における「現代社会」や「倫理」、特別活動を中心として教育活動全体を通して学ぶことになっている。このことは、戦後から高校の道徳教育を高校社会科が担ってきたという背景がかかわっているのだが、社会科で学ぶ知識と道徳教育において学ぶ知識とは、共通するものも多いが根本的には、それぞれの目標とする学びに違いが生じる。今回、小中学校では「特別の教科 道徳」が

スタートすることになった。これに伴い、高校における人間としての在り方生き方教育の在り方についても、今まで以上に踏み込んだ学習のカリキュラムや内容についての検討を行っていくことが求められている。

子どもたちの職業観や勤労観を高め、職業にかかわる能力やスキルアップを目指そうとするキャリア教育が注目を集めるようになってきている。実際、総合的な学習の時間や、特別活動等の体験活動と連携しながら、キャリア教育の充実をはかる高校が増えてきている。だが、真のキャリア教育を目指すためには、職業にかかわる知識や理解、スキルアップだけでは、多くの職業の中から自分に適正するものを選択する段階にいたらないことが多い。したがって、高校生期における「道徳」授業を通して、職業にかかわる価値と照らし合わせながら、人間としての在り方生き方について考える自己内省の時間を、十分に確保していくことが必要である。

#### (5) 諸外国と日本における高校生期の道徳教育の実際

アメリカにおける道徳教育は、キャラクター・エデュケーションとサービス・ラーニング(SL)活動という、理論と実践を連携させながら学習が行われている。キャラクター・エデュケーションには、専門カウンセラーがついており、授業だけではなく、児童・生徒一人一人の学習計画サポートを行っている。キャラクター・エデュケーションで学んだことは、SL 活動を通じてより実践的に体験できるような学習システムが確立されている。SL 活動は、生徒が主体的にプロジェクトを計画することから始まり、進捗状況は常に「self-examination note」に書き留めることを習慣化し、自己内省を深めながら次のステップへ進むことが目指されている。プロジェクトの途中で専門的な知識やスキルが必要になった場合も、地域の教育機関や企業、あるいは一般家庭等と連携し、生徒の教育的支援を行うカリキュラムが整っている。つまり、家庭、地域と学校が連携してプロジェクトやイベントを行っており、子どもたちの教育は地域住民が協力し合って行うことが共通理解として示されているのである。

また、生徒が自己の進路決定を行う際には、クラス担任だけではなく、スクール・カウンセラー(SC)やスクール・サイコロジスト(SP)等が関わって、多面的に進路指導を行う。こうした専門カウンセラーが介入することによって、より具体的な進路指導が可能になる。

中国では、近年、「素質教育」への注目が集まっており、子どもがバランスよく成長を遂げることができるよう、評価方法も多面的な手法が試みられている。また、高校では「思想政治」の学習の中に、社会集団の一員としての責任と義務を負うことが盛り込まれ、道徳教育の関連内容として指導されている。近年では、中国版シティズンシップ教育ともい

うべき学習内容が積極的に取り入れられるようになってきている。また、生徒は学校と寮生活を通して、集団における自己の役割を認識し、その責務を果たすことが求められる。

韓国では、小・中学校段階の道徳教育は教科として位置づけられている。高校では道徳教育関連科目として「倫理と思想」が選択科目として設定されており、この中には宗教教育に関連する学習内容も含まれている。また、ICT教育を導入し効果的に授業を行っていることも、韓国における道徳教育の特徴としてあげられる。

日本でも、高校生期の「人間としての在り方生き方」教育や ICT 教育、宗教教育に関する取扱いを検討していくことは、今後の大きな課題であるといえる。

### (6) 高等学校における道徳教育のグランドデザインについての提案

本研究の研究成果として、高校生に対する道徳教育のグランドデザインの構想について、以下の図1に示す。

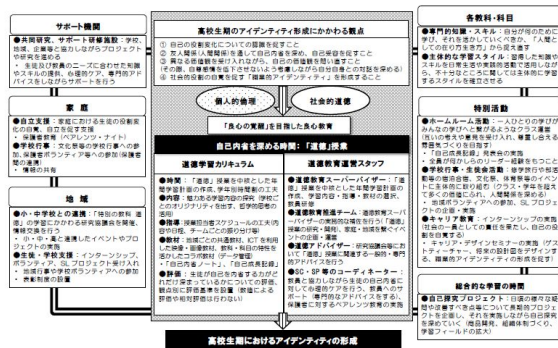


図1 高等学校における道徳教育のグランドデザイン

本研究では、高校生期における「良心の覚醒」を目指す良心教育を道徳学習に取り入れることを目的として「道徳」授業を構想する。「道徳」授業を教育課程上に位置づける目的は、高校生が「自己内省を深める時間」として、日常のあらゆる価値と「人間としての在り方生き方」とのかかわりについて道徳学習を通して自分自身を振り返る時間を確保するためである。

「道徳」授業を本格的に実施するためには、学校内における組織づくりからはじめる必要がある。例えば、道徳スーパーバイザー、道徳教育推進チーム、道徳アドバイザー、SCやSP等のコーディネーターらによって構成される「道徳教育運営スタッフ」が中心となって、道徳学習のカリキュラムを選定、開発していくことが求められる。

ここでは高校生が自己を振り返るためのツールとして「自己内省ノート」や「自己成長記録」を作成し、普段の体験から得た様々な価値について、あらためて自分で捉え直すことが重要である。

「道徳」授業と各教科・科目との連携では、

自己の将来に結びついているのかを理解することで、主体的な学習スタイルの確立を目指すことが必要である。次に、特別活動との連携においては、ホームルーム活動、学校行事、生徒会活動における体験活動を「道徳」授業で振り返ることにより、実社会でよりよく生きていくための価値意識を育むことが目指される。

ここでは職業を通して自己の「人間としての在り方生き方」について考え、「職業的アイデンティティ」の形成に向けて自己の社会的役割を受け入れていくことが求められる。総合的な学習の時間との連携では、高校生に日常生活のあらゆる疑問点や改善点を自己の実践活動と結びつけて、自己探究プロジェクトを実施することを目指す。

高校における道徳教育を充実させていくためには、家庭や地域等との連携をはかっていくことが必要である。つまり、高校生の道徳性発達を考える上では、もはや生徒本人を指導することだけでは十分ではないということである。そこで、大学や教育研究機関等のサポート機関に協力を得ながら、生徒と教員に対する研修および支援していくことが求められる。また、保護者に対してはSCやSP等をコーディネーターとしてペアレンツ教育を行ったり、地域の人々に対してボランティアやインターンシップ、SL活動の意義について理解をしてもらったり等、生徒を多面的に支えていくことが目指されなければならない。

「道徳」授業を要として、教育活動全体を通して道徳学習を進めることによって、高校生はあらゆる場面で自己の良心に問いかける機会をもつことになる。それらが積み重なることが「良心の覚醒」へと繋がっていくのである。この内的成長過程を客観的に自己評価し、必要な価値を統合していくことによって、高校生期に求められるアイデンティティの形成は促されるのである。

本研究では、高校「道徳」を教科として位置づけて検討しなかったが、今後、教科化を検討する場合には、教育課程上のどこに高校「道徳」を位置づけるかが問題となると考えられる。また、教科になった場合は教科書の作成や、評価の仕方、大学の教員養成課程の改革や現職教員に対する研修制度の充実等についてもさらに検討していくことが求められる。

### (7) 今後の課題と高校生期における道徳教育の展望

今後の課題としては、以下に示す三つがあげられる。第1に本研究で提案した道徳教育の在り方に関する構想図を学校現場において実践し、構造モデルの妥当性について検討をはかることである。第2に、高校「道徳」授業の教育的効果の評価を行うことによって、具体的な学習プログラムや指導書の作成を行う。第3に、「自己内省ノート」をはじめ

めとする高校「道徳」用の教材開発を行うことによって、道徳教育の充実を目指すものである。また、高校「道徳」が教科化する場合には、新科目「公共」との関連、大学の教員養成課程と高校教員の研修制度改革、高校「道徳」の教員免許、教科書の作成、評価について、より具体的に検討していくことが必要となる。

本研究における成果は、高校「道徳」の教科化に向けての第一歩になると考える。

#### 参考文献

- 三上 登、高等学校社会科『倫理・社会』の変遷について、哲学会誌(弘前大学紀要)、19号、1984、25-32
- 西野 真由美、高等学校における道徳教育とキャリア教育、高校生の職業観形成に関する比較教育文化的研究、2012、67
- 関根 明伸、韓国の道徳教育から何を学ぶか、押谷由夫・柳沼良太 編著『道徳の時代がきた!』教育出版、2013、90-91
- 岡田大爾、中国の近年の教育改革と教師の資質向上の課題、広島国際学院大学研究報告、44号、2011、59
- Lickona, Educating for Character: How Our Schools Can Teach Respect and Responsibility, Bantam Books, 1991, 161-184
- 山本 晃、青年期のこころの発達、星和書店、2010、100
- 杉村 和美、現代女性の青年期から中年期までのアイデンティティ発達、女性の生涯発達とアイデンティティ、1999、55-86
- 落合 良行・佐藤 有耕、親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析、教育心理学研究、44号-1、1996、11-22
- 山田 みき・岡本 祐子、現代青年の自己受容、広島大学大学院教育学研究科紀要、3巻55号、2006、340
- 岡田 努、現代青年の心理学、世界思想社、2007、74
- 宗近 悠子・田島 司、勤労者の職業的アイデンティティが心身に及ぼす影響、北九州市立大学文学部紀要、14号、2007、11-21
- Spranger, E., PSYCHOLOGIE DES JUGENDALTERS. Hedielsberg, Quelle & Meyer Verlag, 1924, 151, 202-227

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

押谷由夫「世界に発信する道徳教育を」(『弘道』125巻1107)公益法人日本弘道会 2017 31-34頁 査読無

押谷由夫「自己形成史」ノート(1) - 自己の価値意識形成史から見た道徳教育を考える -」(『学苑・初等教育学科紀要』908巻) 昭和女子大学 2016 56-71頁 査読有

押谷由夫「心に響き心を耕す道徳教育の充実」(『中学校』740巻)全日本中学校長会 2015 4-7頁 査読無

押谷由夫「道徳教育新時代の幕開け」(『Principal』19-8巻)学事出版 2015 16-19頁 査読無

押谷由夫「道徳教育の政策的流れとその意図・背景」(『季刊 教育法』第185号)エデル出版 2015 6-11頁 査読無

押谷由夫「音楽教育への期待 人間らしい心を育む基盤として」(『音楽教育学』第45巻第1号)日本音楽教育学会 2015 48-52頁 査読無

[学会発表](計1件)

・押谷由夫「日本における道徳教育改革」(ヘルシンキ大学宗教倫理道徳研究会 招待講演)ヘルシンキ(フィンランド)2015.3.26 [図書](計3件)

押谷由夫、角屋重樹、小原友行、中原忠男、山本隆春、深澤広明、湯澤正通、棚橋健治、大高泉他『教科教育研究ハンドブック』教育出版 2017 160-165頁

押谷由夫、柳沼良太、新井浅浩、貝塚茂樹、関根明伸、西野真由美、松本美奈『道徳の時代がきた』教育出版 2014 2-9頁 76-81頁

押谷由夫、貝塚茂樹、関根明伸、西野真由美、松本美奈『道徳の時代がきた』教育出版 2013 2-10頁

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

押谷 由夫 (OSHITANI, Yoshio)  
昭和女子大学・生活機構研究科・教授  
研究者番号：50123774

##### (2) 連携研究者

南本 長穂 (MINAMIMOTO, Osao)  
関西学院大学・文学部・教授  
研究者番号：60108371

吉澤 良保 (YOSHIZAWA, Yoshiyasu)  
東京純心女子大学・現代文化学部・教授  
研究者番号：60367232